

平成30年5月7日現在

機関番号：24506

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K01687

研究課題名(和文) 児童養護施設における高齢者の教育支援活動が児童と高齢者の心身の健康に及ぼす影響

研究課題名(英文) The educational support program for the children in a child welfare institution offered by the senior volunteers and its influence on their mental and physical health

研究代表者

内田 勇人(Uchida, Hayato)

兵庫県立大学・環境人間学部・教授

研究者番号：50213442

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：およそ2年間にわたる計4回の調査を通して、高齢者(3名)との交流が児童養護施設入所児童(小学1年生から中学1年生。37名)の高齢者の年齢イメージの形成に役立ち、高齢者イメージをポジティブな方向へ変化させていたことが示唆された。学校生活の中の友人との関係においても望ましい変化が看取され、児童養護施設入所児童に対する高齢者ボランティアによる教育支援活動は入所児童に対して有意な効果を及ぼすことが示唆された。

研究成果の概要(英文)：We discussed the educational support program supported by the senior volunteers for the children living in a child welfare institution and clarified its influence on their mental and physical health. Thirty-seven children (age range 6-13) who live in a child welfare institution in Hyogo Prefecture, the western part of Japan. In a longitudinal survey that we performed between February 2016 and November 2017, we inquired children about the effects of the program and their images of the elderly. The images of the elderly in the items such as "warm" significantly improved ($P<0.05$). The score of "support for friends" was also significantly improved in children living in the institution ($P<0.05$). These findings suggested that the implementation of the program supported by the elderly possibly improves the institutionalized children's images of the elderly including warm and the relationships between their friends and participants of this study.

研究分野：健康教育学

キーワード：児童養護施設 児童 高齢者 教育支援 ボランティア 学校生活

1. 研究開始当初の背景

現在、虐待や何らかの障害が理由となって児童養護施設へ入所する児童が増加しており、心身の健全な発達の障害が危惧されている。その一方で、平均寿命が女性は 86 歳、男性は 80 歳を超える高齢社会を迎えているにもかかわらず、高齢者が生きがいを持って働いたり、活動できる場は必ずしも多いとは言えず、高齢者が社会参加する場・生きがいの場の減少が指摘されている。本研究は、これら両課題の解決を目指すものである。高齢者による児童養護施設入所児童への種々の教育支援活動(宿題支援、苦手な科目への対応、遊び・レクリエーション等)が、両者の心身の健康に及ぼす影響について明らかにすることを目的とする。

平成 25 年に報告された厚生労働省の調査結果をみると、児童養護施設入所児童は 28,831 人となっている。入所児童の特徴として、虐待を受けた子どもは 53.4%、何らかの障害を持つ子どもが 23.4%と増えており、多方面からのケアの必要性が指摘されている。児童の平均年齢は、10.6 歳であり、心身の発達が顕著な時期を施設にて過ごしている。施設職員の献身的なケアが施されている一方で、子どもの心身の健康に及ぼす影響が危惧されている。一方、我が国は世界に例を見ない速さで高齢化が進行しており、高齢者の心身の健康をいかにして保持し増進させるかが喫緊の課題となっている(内閣府 2014)。元気で活発な生活を送る高齢者が数多くみられる一方で、家の中で趣味に講じたり、種々の活動をする高齢者が多いのが実情である。家の中での活動が多くなることで、社会とのつながりが希薄になり、生きがいを喪失し、心身の健康に負の影響を及ぼすことが危惧されている。

養護を必要とする児童の増加、及び高齢者における社会との繋がり希薄化の両問題に対して、早期に有効な方策を立案・実施することが喫緊の課題として指摘されている。

児童養護施設は、保護者のない児童や保護者に監護させることが適当でない児童に対し、安定した生活環境を整えとともに、生活指導、学習指導、家庭環境の調整等を行いつつ養育を行い、児童の心身の健やかな成長とその自立を支援する機能を持つ。社会的養護が必要な子どもを、できる限り家庭的な環境で、安定した人間関係の下で育てることができるよう、施設のケア単位の小規模化やグループホーム化などが推進されている。入所児童の平均年齢は 10 歳前後であり、心身の発達が著しい時期を施設で生活している。児童養護施設では施設職員の献身的なケアが施され、入所児童の心のケア、家庭復帰をめざした環境の調整等が行われているが、財政的な制約の中で限られた職員数による養護の困難さも指摘されている。

我が国は世界に例を見ない速さで高齢化が進行しており、高齢者の心身の健康をいかに

にして保持し増進させるかが喫緊の課題となっている(内閣府 2014)。健康寿命の延ばしを目的として、要介護化を防ぐ施策が進められている一方で、元気で活発な生活を送る高齢者が数多くみられ、高齢者が生きがいを持って働き、活動できる場の創造が益々重要視されている。

高齢者の生きがい創造の場・自己実現の場として、社会的に益々養護を必要とする児童養護施設入所児童と高齢者が教育支援活動を通じて関わりを有していくことは、双方へ有為な影響を及ぼすことが期待される。先行研究をみても、高齢者による教育支援が入所児童へいかなる影響を及ぼすのかについて明らかにした研究はわずかにみられるのみであり、特に彼らの心身の健康にいかなる影響を及ぼすのかについては、ほとんど研究が行われていない。国外においても同様であり、高齢者が小学校教育へ参加することの意義を明らかにした研究として、アメリカ合衆国やイギリス等における「Experience CorpsR プロジェクト」研究(Linda P. Fried et al, Journal of Urban Health, 2004~2008 に続けて論文を発表)がある一方で、施設において養護を受けている児童と高齢者の交流が、彼らの心身の機能にいかなる影響を及ぼし得るのかについて明らかにした研究はみられない。すなわち、国内外ともに未だ十分な知見が得られていない現状から、緊急度が極めて高い先進的研究と位置づけられると考える。

2. 研究の目的

このような背景のもと、本研究では主に以下のことを明らかにすることを目的とする。

1) 入所児童が高齢者と定期的に教育支援を受けることにより、子どもの側の日常生活行動、施設での生活、先生との関係、友人との関係、ライフイベントに対するストレス度、精神的健康度がいかなる変化を示すかについて明らかにする。

2) 両者への影響を明らかにし、早期に実施可能な方策を考案・立案する。

3. 研究の方法

研究参加者として、A 児童養護施設に入所する小学 1 年生から中学 1 年生までの児童生徒 37 名(男子 21 名、女子 16 名)、地域の高齢者ボランティア 3 名(男性 2 名: 67 歳、79 歳、女性 1 名: 69 歳)を選んだ。調査内容は、「基本属性(学年、年齢、性別、氏名)」「高齢者に対するイメージ」「学校生活」「不定愁訴」「自己効力感」「学校環境適応感尺度」を選択し、自記式アンケート調査法により回答を求めた。

イメージ調査には、Semantic Differential 法(意味微分法、以下 SD 法と略す)による尺度を用いた。SD 法とは、いくつかの相反する形容詞を対語にして、多段階評定する尺度であり、被験者が刺激概念(コ

ンセプト)に対して抱いているイメージを数量的・操作的に測定することができる。もともと、言語の意味(情緒的意味)の測定法として開発されたが、今日では、イメージの測定法として広く利用されている。

学校生活を中心とした質問には「いつも喜んで、クラスの人と協力できますか。」「助けてほしい人がいれば、いつもその人を助けますか。」「助けてほしい人がいれば、いつもその人を助けますか。」「年上の人には、いつもれいぎ正しくしていますか。」「自分の失敗を、時々、人のせいにしますか。」「いつも部屋の整理整頓には気がつけていますか。」の5項目を選択した。

不定愁訴に関する質問には、「おなか痛くなる」「食欲がない」「はきそうになる」「げりをする」「息苦しくなる」「からだのだるい」「立ちくらみをおこす」「朝、しんどい」「自動車に乗ると気分が悪くなる(2回の乗車で1回以上ある)」「頭が痛くなる」「夜、ねむりにくい」「目がつかれる」「肩がこる」「手や足が痛くなる」の14項目について1週間に1回以上あるかないかの回答を求めた。

自己効力感に関する質問には、「何か計画するときには、その計画が必ず実現できると思う。」「しなければならぬことがあるのに、なかなかとりかかれない。」「失敗しても、最後までやりとげることができる。」「大切な目標があっても、なかなか実行できない。」「最後までやりとげる前にあきらめてしまうことが多い。」「面倒なことでも、しなければならぬことならやりとげるまで頑張る。」「何かしようと思えば、すぐそれにとりかかる。」「新しく勉強しようとするのが難しそうだと、はじめからやろうしない。」「失敗すると、よけいにやる気がおきる。」「物事がやりとげられるかどうか、心配である。」「他人には頼りたくない。」の11項目について「非常によくあてはまる」「かなりあてはまる」「どちらでもない」「ほとんどあてはまらない」「まったくあてはまらない」の5件法で回答を求め、5点から1点を与え、3点を中立点とした。各項目の得点が高いほど一般的に肯定的なイメージを表す。

学校環境適応感の調査には、アセス(ASSESS:Adaption Scale for School Environments on Six Spheres)による尺度(34項目)を用いた。34項目は「生活満足感」「教師サポート」「友人サポート」「向社会的スキル」「非侵害的関係」「学習的適応」の5つの下位尺度に分けることができる。

分析方法として、計4回の調査の間で2元配置分散分析、t検定(対応あり)、カイ2乗検定、マクネマー検定(McNemar)を用いた。統計学的有意水準は5%未満に設定し、データの分析にはIBM SPSS Statistics 24を用いた。調査は平成28年2月(第1回)、平成28年4月(第2回)、平成28年9月(第3回)、平成29年11月(第4回)の合計4回行った。

4. 研究成果

1) 1年間の変化

研究参加者として、兵庫県A市のA児童養護施設に入所する小学1年生から6年生までの児童24名(男子12名、女子12名、 9.3 ± 1.8 歳、以下入所児童)、対照群としてA小学校3年生から6年生67名(男子29名、女子38名、 10.0 ± 1.2 歳)を選んだ。高齢者は同市に在住する男性3名(79歳、75歳、65歳)であった。教育支援の内容は、1週間に3回の頻度で小学校の担任より出された宿題を適宜補助した。調査内容として、児童に対しては「性別」「学年」「アセス(学校環境適応感尺度)」「不定愁訴(14項目)」を選択した。入所児童にのみ「自己効力感」等に関する項目を選び、それぞれ聞き取りアンケート形式により調査を行った。調査は2016年1月下旬と3月中旬から4月の2回実施した。高齢者に対しては、「教育支援に関する感想・気づき」について、個別インタビューを行った。分析方法は平均値の差は対応あり、もしくは対応なしのt検定、頻度の差は2検定、McNemar検定をそれぞれ用いて統計学的有意性($p < 0.05$)を検証した。教育支援前後におけるアセス総得点、項目別得点を比較したところ、対照群においては有意差がみられなかったが、入所児童群においてはアセスの総得点($p < 0.05$)、「授業がよくわかるようになった」「元気がないとき友だちはすぐ気づいて声をかけてくれた」の各項目得点(各 $p < 0.05$)および自己効力感の中の「何かしようと思えば、すぐそれにとりかかる」の得点($p < 0.01$)が有意に高まっていた。高齢者ボランティアによる児童養護施設入所児童への教育支援は、入所児童の学校環境適応感全体、中でも学習面や友人との関係、および自己効力感の一部にポジティブな影響を与えることが示唆された。

2) 2年間の変化

研究参加者として、A児童養護施設に入所する小学1年生から中学1年生までの児童生徒37名(男子21名、女子16名)、地域の高齢者ボランティア3名(男性2名:67歳、79歳、女性1名:69歳)を選んだ。一般的な高齢者に対する年齢イメージは、第1回目と初期と比較して3回目(7カ月後)、4回目(21カ月後)に有意に上昇していた。高齢者に対する「温かい」イメージ得点は、第1回目と比較して第2回目(2カ月後)に有意な差がみられた。その他の項目では有意な差はみられなかったものの、「親切」「やさしい」の得点が上昇傾向にあった。学校環境適応感においては、「友人サポート」得点が第2回目と第3回目と比較して第4回目に有意に上昇していた。およそ2年間にわたる計4回の調査を通して、高齢者との交流が児童養護施設入所児童の高齢者の年齢イメージの形成に役立ち、高齢者イメージをポジティブな方向へ変化させていたことが示唆された。

学校生活の中の友人との関係においても望ましい変化が看取され、児童養護施設入所児童に対する高齢者ボランティアによる教育支援活動は入所児童に対して有意な効果を及ぼすことが示唆された。

厚生労働省. 児童養護施設入所児童調査結果

<http://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-11905000-Koyoukintoujidoukateikyoku-Kateifukushika/0000071184.pdf>

中富尚宏. 児童養護施設入所児のQOLにおける虐待の影響、厚生指標、64(12)、35-40、2017

小杉恵. 児童虐待予後、大阪府立母子保健総合医療センター雑誌、31(1)、13-18、2015
藤原佳典、西真理子、渡辺直紀他. 都市部高齢者による世代間交流型ヘルスプロモーションプログラム REPRINTS の1年間の歩みと短期的効果、日本公衆衛生雑誌、53、702-714、2006

藤原佳典、西真理子、渡辺直紀他. 児童の高齢者イメージに影響をおよぼす要因、日本公衆衛生雑誌、54、615-623、2007

安永正史、村山陽、大場宏美、野中久美子、藤原佳典. 短期集中的な世代間交流プログラムが児童に与える影響 SD法による高齢者イメージの検討、応用老年学、8(1)、14-22、2014

森田久美子、青木利恵子、小林美奈子、山本晴美、呂曉衛、永嶺仁美、佐々木明子. 学童保育における高齢者との世代間交流の継続的実践における課題、日本世代間交流学会誌、5(1)、11-20、2015

泊裕子、伊丹君和、浅野美礼. 祖父母-孫関係にみた高齢者のQOLに関する研究(2)、日本看護科学会誌、16(2)、364-365、1996
山田和廣. 児童と高齢者の世代間交流効果、日本世代間交流学会誌、1(1)、89-97、2011
中野いく子. 児童の老人イメージ SD法による測定と要因分析、社会老年学、34、23-36、1991

中野いく子、冷水豊、中谷陽明、馬場純子. 小学生と中学生の老年イメージ SD法による測定と比較、社会老年学、39、11-22、1994

栗原慎二、井上弥. アセスの使い方・活かし方、ほんの森出版、2016

内閣府. 平成10年度児童・生徒の高齢化問題に関する意識調査結果

http://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h10_kiso/html/0-1.html#CSV

立澤紫央里. 児童養護施設で生活する幼児から児童の家族イメージについて、白百合女子大学発達臨床センター紀要、19、23-30、2016

保坂久美子、袖井孝子. 大学生の老人イメージ SD法による測定と比較、社会老年学、27、22-23、1988

村松健司. 児童養護施設と学校の協働、臨

床心理学研究、52(1)、1-14、2014

前田清. 児童養護施設入所児の生活満足度や規範意識に対する生活環境の影響に関する一考察、子どもの虐待とネグレクト、15(2)、218-227、2013

大原天青. 養護施設における支援に影響をあたえる要因の検討 支援技法チェックリスト(Child care Checklist for children's homes)を使用して、福祉心理学研究、13(1)、21-31、2017

趙正祐. 児童養護施設の援助者支援における共感満足・疲労に関する研究 CSFの高低による子どもとの関わり方の特徴から、社会福祉学、社会福祉学、55(1)、76-88、2014

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3 件)

内田 勇人、袁 泉、井上 靖子、篠原 光児. 高齢者大学受講者における精神的健康度の実態とその関連要因、兵庫県立大学環境人間学部研究報告、20、53-60、2018

内田 勇人. 介護老人保健施設入所高齢者に対するライフレビュー介入の試み、兵庫県立大学環境人間学部研究報告、19、21-26、2017年3月

内田 勇人、藤賀彩花、江口善章、西垣利男、山本 存、矢野真理. 孫との関係が祖父母の精神的健康度に及ぼす影響、日本世代間交流学会誌、5(1)、29-36、2015

[学会発表](計 13 件)

内田 勇人、武原進拓、篠倉良真、大野暢亮、田村祐一、ラビ・バラダン. 没入型VR装置を用いた高齢者と若年者の間における車両スピード認知の比較、平成29年度日本人間工学会関西支部大会

内田 勇人、松浦伸郎. シニアボランティアによる1年間にわたる教育支援が児童養護施設入所児童の学校生活に及ぼす影響 日本世代間交流学会第8回大会(熊本)

N. Takehara, R. Sasakura, N. Ohno, Y. Tamura, R. Varadhan, H. Uchida. Evaluations of Traffic-Related Cognitive Function of Japanese Older Adults by Virtual Reality System, IAGG (国際老年学・老年医学会議)2017(国際学会)

Hayato Uchida. The Intergenerational Exchanges in Traditional Cultures、第19回 Generations United 国際会議(国際学会)

Hayato Uchida. "Progress of Japan Society for Intergenerational Studies since its start in 2010", Generations United 18th International Conference, Honolulu, USA, July, 2015.

Hayato Uchida, Toshio Nishigaki, Yoshiaki Eguchi, Koji Fukuda, Hideki Toji, Jiro Kuroda. "Effects of relationship with grandchildren on mental health of Japanese elderly persons", 68th Annual Scientific Meeting of Gerontological Society of America, Orlando, USA, November, 2015.
内田勇人, 周雲濤, 松浦伸郎, 平尾浩子. 高齢者による児童養護施設入所児童への教育支援が児童の学校環境適応感に及ぼす効果, 第75回日本公衆衛生学会総会, グランフロント大阪(大阪市北区), 2016年10月26日~28日
矢野真理, 作田はるみ, 内田勇人, 坂本薫. 高齢者による行事食伝承事業に関する研究 高校生が抱く高齢者イメージの変化, 第75回日本公衆衛生学会総会, グランフロント大阪(大阪市北区), 2016年10月26日~28日
平尾浩子, 内田勇人. 小学校における握手プログラムの実施が児童の学校生活に及ぼす効果, 第75回日本公衆衛生学会総会, グランフロント大阪(大阪市北区), 2016年10月26日~28日
周雲濤, 内田勇人. 中国における一人っ子と非一人っ子を持つ親の養老意識について, 第81回日本民族衛生学会総会, 女子栄養大学(東京都豊島区), 2016年11月26日~27日
作田はるみ, 矢野真理, 内田勇人, 坂本薫. 高齢者による行事食伝承事業に関する研究 行事食に対する意識調査結果, 第75回日本公衆衛生学会総会, グランフロント大阪(大阪市北区), 2016年10月26日~28日
矢野真里, 作田はるみ, 内田勇人, 坂本薫. "高齢者が次世代に地域の行事食を伝えるプログラムに関する研究 - 高齢者と高校生における食文化の伝承に関する初回調査結果", 日本世代間交流学会第6回全国大会, 大阪, 2015年10月
内田勇人, 松浦伸郎, 江口善章, 矢野真理. "孫の存在が高齢者の精神的健康度に及ぼす影響", 第74回日本公衆衛生学会総会, 長崎, 2015年11月

〔図書〕(計 3 件)

草野篤子, 溝邊和成, 内田勇人, 安永正史 編著(第3章 内田勇人). 世界標準としての世代間交流のこれから, 第3章「伝統文化の世代継承に対する世代間交流学からのアプローチ」三学出版(大津)
黒田次郎, 石塚大輔, 萩原悟一 編著(第8章 内田勇人). スポーツビジネス概論, 第8章「スポーツと医療関連ビジネス」叢文社(東京)
内田勇人, 『スポーツビジネス概論』(黒田次郎・石塚大輔・萩原悟一編著), 叢文社(東京), 32名で分担執筆, 2016年3月,

第10章「スポーツと医療関連ビジネス (pp.120-130)」を担当

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等
<http://kyoin.u-hyogo.ac.jp/staff/shse/uchida/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

内田 勇人 (UCHIDA, Hayato)
兵庫県立大学・環境人間学部・教授
研究者番号: 50213442

(2) 研究分担者

篠原 光児 (SHINOHARA, Kouji)
兵庫県立大学・環境人間学部・教授
研究者番号: 00206111

井上 靖子 (INOUE, Yasuko)
兵庫県立大学・環境人間学部・教授
研究者番号: 00331679

江口 善章 (EGUCHI, Yoshiaki)
兵庫県立大学・環境人間学部・教授
研究者番号: 10249469

(3) 連携研究者

()

研究者番号:

(4) 研究協力者

()